



医療法人 厚生堂

長崎病院

広報誌

2026.9

vol.

148

むつみ

当院の理念

私たちは良質で安心な医療の提供により、患者様や家族の皆様との信頼を築き、常に「思いやりの医療」を念頭に、地域社会に貢献します。

目次

大腸がん検診を受けていますか.....1

お知らせ.....4

デイスサービスの紹介.....2・3

大腸がん検診を受けていますか

一症状がない今こそ、
早期発見の機会です— 医師 横山 尚子

大腸とは

大腸は、食べ物が胃や小腸で消化・吸収されたあとに通る、消化管の最後の部分です。主な働きは、便から水分を吸収して便の形を整え、体の外へ排出する準備をすることです。大腸の調子は、便秘や下痢、腹痛、血便など、日々の体調にも深く関係しています。

大腸がんとは

大腸がんは、その大腸に発生するがんです。日本人にとって非常に身近ながんの一つで、男女ともに罹患数・死亡数ともに多いがんです。食生活の欧米化、運動不足、肥満、飲酒、喫煙などの生活習慣も関係するとされ、年齢とともに発症のリスクが高くなります。

早期には自覚症状がほとんどなく、血便、便が細くなる、便秘や下痢を繰り返す、腹痛、貧血、体重減少などの症状が出たときには、すでに進行していることもあります。一方で、早期に発見できれば治療成績は良好で、内視鏡治療など体への負担が少ない治療で済む可能性もあります。だからこそ、「症状が出てから受診する」のではなく、「症状がないうちに検診で見つける」ことが大切です。

大腸がん検診とは

国の指針では、大腸がん検診は40歳以上を対象に、年1回、便潜血検査で行うことが勧められています。便潜血検査は、便の中に目に見えない微量の血液が混じっていないかを調べる検査です。大腸がんや大腸ポリープでは、病変の表面から少量の出血が起こることがあり、そのサインを調べます。検査は自宅で便を採取して提出するだけで、食事制限や下剤による前処置も不要です。体への負担が少なく、忙しい方にも受けやすい検査です。

また、科学的根拠に基づいて、大腸がん死亡率を減少させる効果が認められる検査です。

ただし、便潜血検査は一度受ければ終わりではありません。大腸がんやポリープからの出血は毎日必ず起こるわけではないため、がんがあっても陰性となることがあります。検査の限界を補うためにも、毎年継続して受けることが大切です。

大腸がん検診を受けましょう

日本の大腸がん検診受診率は、まだ十分とはいえませ

ん。2022年の国民生活基礎調査では、40～69歳で過去1年間に大腸がん検診を受けた人の割合は、男性49.1%、女性42.8%でした。年々、少しずつ上昇していますが、対象者の半数前後にとどまっています。国の第4期がん対策推進基本計画では、がん検診受診率60%が目標とされており、さらなる受診率向上が求められています。

便潜血検査が陽性だったら、大腸内視鏡検査を受けましょう

さらに重要なのが、便潜血検査で陽性となった後の精密検査(大腸内視鏡検査)です。

便潜血陽性は「大腸のどこかで出血があった可能性」を示すサインであり、通常は大腸内視鏡検査による精密検査が必要です。

「痔があるから陽性になったのだろう」「もう一度便検査をして陰性なら大丈夫」と自己判断することは危険です。便潜血検査は、がんを確定する検査ではなく、精密検査が必要な人を見つけるための入口です。陽性になったからといって必ず大腸がんというわけではありませんが、実際に精密検査で大腸がんや、将来がん化する可能性のあるポリープが見つかることがあります。大切なのは、陽性というサインを放置しないことです。

また、便潜血検査が陰性であっても、血便、腹痛、便通異常、便が細くなる、貧血、原因不明の体重減少などの症状がある場合は、次の検診を待たずに医療機関を受診してください。検診は「症状のない方」を対象にしたものです。症状がある場合には、検診ではなく診療として詳しい検査を受ける必要があります。

まとめ

大腸がん検診は、決して特別な検査ではありません。**40歳**を過ぎたら、**年に一度**の習慣として便潜血検査を受けましょう。そして、陽性となった場合には、必ず**精密検査(大腸内視鏡検査)**を受けましょう。症状がない今こそ、早期発見のための大切なタイミングです。ご自身のために、そしてご家族の安心のために、大腸がん検診を毎年の健康管理に取り入れてください。

お住まいの自治体によっては、大腸がん検診の受診券やクーポン券が配布されている場合があります。対象年齢や実施期間、受診できる医療機関は自治体によって異なりますので、市区町村からの案内やホームページをご確認ください。